

インターバンクの声（2015年9月11日）

前日の日経平均が1343円高と歴代6位の上昇幅を記録したものの、昨日は寄り付き直後に一時800円を上回る下落を経て470円安で取引を終了。歴代4位、5位の上昇幅となった1990年3月の1486円高の翌日以降5営業日で3800円以上下落したほか、1990年8月の1439円高の翌日から5営業日で2900円余りの下落。すなわち、単なる需給要因だけで急騰した株価はその後下落する傾向があるという経験則を踏まえれば、昨日の470円安はある程度、仕方のないこと。そして本日はメジャーSQもあり、どのように消化できるのか東京市場は引き続き日経平均の動向に注目。

一方のドル円は朝方の日経平均の下落もあり、一時120円割れまで下落したものの日経平均が500円安前後で揉みあい続ける中でも徐々に反発し120円台半ば超え。為替ディーラーにとってみれば、特に最近の日経平均や上海株の動向に翻弄されるドル円なだけに、株が下げているのにもかかわらずドル円が反発、という理屈が受け入れられず戸惑い気味。海外市場でも121円32銭から120円46銭と上へ、下へと方向の定まらない値動きに。要は9月以降、日経平均の日中の値幅が500円を超えることが当たり前の状況下、理屈通りに動かない金融市場。

結局、来週16-17日のFOMCを控え、利上げするのか、しないのか煮え切らない不透明感と払拭できない中国経済の先行き懸念。こうした大きな雲が不安心理を煽り、売り向かえば売り急ぎ、上昇すれば買い遅れまいと追随。上かと思えば下、下かと思えば上、来週のFOMCで金融市場を覆う大きな雲の一つが去るのか、依然として変動の大きな値動きが続くそう。そういえば、13日にも中国の小売売上高、鉱工業生産、固定資産投資などの指標の発表もあるだけに、来週早々も神経質な値動きが継続しそう。週末くらいはリラックスして過ごしたいもの。

提供：SBIリクイディティ・マーケット株式会社

お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。

本レポートに表示されている事項は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。